聖霊降臨後第25主日（特定27）　マルコ12章38―44節

［直訳］

38 そして　彼の教えにおいて　彼は言っていた、
「あなたがたは気をつけなさい　律法学者たち　欲している者たちに
長い衣服で　歩くことを、そして　挨拶を　市場で
39 そして　上席を　会堂で、そして　上座を　宴会で、
40 食い尽くす者たち　やもめたちの家々を
そして　見せかけで　長く　祈る者たち。
これらの人々は　受け取るだろう　より以上の有罪判決を」。

41 そして　座って　さい銭箱の向かい側に　彼は眺めていた
どのようにして　群衆が　投げるか　銅貨を　さい銭箱の中へ。
そして　多くの金持ちが　投げていた　多くのものを。
42 そして　来て　一人の貧しいやもめが　投げた　二つのレプトンを、
それは　クァドランスである。
43 そして　呼び寄せて　彼の弟子たちを　彼は言った　彼らに、
「ほんとうに　私は言う　あなたがたに　次のことを
この貧しいやもめは　さらに多く　すべての人々よりも　投げた
投げる人々よりも　さい銭箱の中へ。
44 なぜならすべての人は　彼らに余っているものの中から　投げた、
だがこの女は　彼女の欠乏の中から
彼女が持っていたすべてのものを　投げた
彼女の生活全部を」。

［新共同訳］

38 イエスは教えの中でこう言われた。「律法学者に気をつけなさい。彼らは、長い衣をまとって歩き回ることや、広場で挨拶されること、39 会堂では上席、宴会では上座に座ることを望み、40 また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」
41 イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。42 ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クァドランスを入れた。43 イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。44 皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

①構成

ⓐ 38 ― 40 節

㋐ 38 節の三行目から 39 節の表現は、38 節の「欲している者たち」が欲している事柄を表している。傍線をつけた三つの表現、「欲している者たち」「食い尽くす者たち」「祈る者たち」は、いずれも律法学者のあり様を説明している。

㋑「見せかけ」と訳した語には「言い逃れ・口実」という意味もあるので、「やもめの家を食い尽くしていることを隠すための言い逃れとして、長い祈りをする」という意味に取ることもできる。いずれにしても、この段落での「やもめ」は社会的に見て食い物にされやすい弱者として描かれている。

ⓑ 41 ― 44 節

㋐ 43 節の点線をつけた「投げる人々よりも」は前の行の「すべての人々よりも」に修飾する分詞形であり、「さい銭箱に投げるすべての人々よりも」と訳すことができる。この句は、お金を投げ入れていたすべての人の中のだれか一人が比較対象になっているとも考えられるが、お金を投げ入れていた人々全体と比較されていると取ることも可能である。そうであれば、やもめの態度はいっそう賞賛されたことになる。

㋑ 44 節の最後の行の「生活」は、「生活費」の意味にもなる。しかし、ここでは「生活」の意味で使っていると思われる。「欠乏の中」にあるやもめが、「持っていたすべてのもの」を投げ入れたことに、彼女の生活全体が神に差し出されていることが示されているからである。この段落での「やもめ」は、人の力を期待できないがために、神にのみ信頼する人を表している。

②律法学者とやもめ（38 節―40 節）

ⓐ「気をつけなさい」

イエスは「律法学者に気をつけなさい」と教える。ここで「気をつけなさい」と訳した言葉は「見る」という動詞である。だから、「気をつけなさい」といっても、律法学者の悪行の餌食にならないように「警戒しなさい」の意味ではなく、彼らの姿を「見て、そのあやまちを知り、まねをしないようにしなさい」の意味だろう。

ⓑ「欲している者たち」「食い尽くす者たち」「見せかけで祈る者たち」

気をつけるべき律法学者とは、長い衣服で歩き、市場では挨拶を、会堂では上席を、宴会では上座を「欲している者たち」であり、やもめの家を「食い尽くす者たち」であり、見せかけで長く「祈る者たち」である。彼らは長い服を着て権威を見せびらかし、人々からの尊敬を追い求め、豊富な知識を活用してやもめの財産を不当に手に入れ、それを覆い隠すかのように、長い祈りを行う。

ⓒこのような偽善はただ律法学者のみに見られるのではない。イエスが批判するのは律法学者なのではなく、権威や尊敬を求め、やもめを抑圧し、見せかけで祈る律法学者である。イエスに「どれが第一の掟か」と尋ねた「律法学者の一人」はイエスによって賞賛されている。

ⓓ多くの律法学者に見られるこの偽善は、彼らに神がいなくなることから生じる。もし心から神を求めているなら、やもめに対する態度もまったく違って来る。彼らは出エジプト 22 章 21 ― 22 節に「寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。もし、あなたが彼を苦しめ、彼がわたしに向かって叫ぶ場合は、わたしは必ずその叫びを聞く」とあるのを熟知しているはずだからである。

③金持ちとやもめ（41 節―44 節）

ⓐ「イエスは眺めていた」

㋐イエスはさい銭箱の向かいに座って、人々の様子を見ている。多くの金持ちが「多くのものを」投げ入れた。だが、一人の貧しいやもめは「二レプトン」を投げ入れた。イエスが目に留めた人は金持ちではなく、この貧しいやもめである。41 節の「投げていた」は継続反復を表す未完了過去形。他方、42 節のやもめの行いを述べる「投げた」は一回的行為を表す不定過去形。やもめは繰り返すことのできない献げ物をささげた。

㋑イエスはわざわざ弟子たちを呼び寄せる。ここでの「呼び寄せる」は距離の離れた所にいる者を呼ぶの意味ではなく、そこにすでにいる者に「注意を喚起する」の意味だろう。イエスは貧しいやもめの姿に注意を向けさせるために、弟子たちを呼ぶ。

㋒「さい銭箱」を意味するギリシア語ガーゾフュラキオンは、ガーザ〈宝物・財宝〉とフュラクス〈番人〉との合成語である。さい銭箱は神殿の「女子の庭」に置かれていた。「女子の庭」はヘロデ神殿の建物から最も遠く離れた内庭の東側に位置していた。女子はこれより奥には入ることができなかった。さい銭箱は雄牛の角で作ったラッパの形をしていた。ラッパ型の容器は 13 個あり、そのうちの 6 個は自発的な献金のため、2 個は神殿税のため、その他の 5 個には、鳥の献げ物、木材の献げ物など、特定の目的が書かれていた。

ⓑ「この貧しいやもめはすべての人々よりもさらに多く投げた」

イエスが見ていたのは、さい銭の額の多寡ではない。だから、「この貧しいやもめはすべての人々よりもさらに多く投げた」と述べる。このやもめが納めたさい銭は二レプトンであった。レプトンはローマの銅貨で、一デナリオン（労働者の一日の賃金）の一二八分の一にあたる小銭である。金額の多寡でいえば、彼女の納めた「二レプトン」は誰よりも少ない額であったにちがいないが、イエスは「すべての人々よりもさらに多く投げた」と賞賛する。やもめは持ち物すべてを献げたからである。

ⓒその理由が 44 節に述べられている。この節の前半と後半とは見事に対応する文章になっている。それを示すと、次のようになる。

節前半	節後半
すべての人は	この女は
彼らに余っているものの中から	彼女の欠乏の中から
	彼女が持っていたすべてのものを
投げた	投げた
	彼女の生活全体を。

㋐両者の対応は明らかだが、大きな違いもある。節前半では何を投げ入れたのか、それを示す目的語がない。しかし、節後半ではそれを「彼女が持っていたすべてのものを」とまず述べ、最後に念を押すように、「彼女の生活全体を」と繰り返している。

㋑神の目から見ると、余っているものの中から出したすべての人は「ゼロ」を投げたに等しく、やもめは持っていた「すべてのもの」を投げている。神が求めるのは金額ではない。生活全体であり、神に託して生きるその姿勢である。

㋒金を献金箱に「投げる（バッロー）」という表現が繰り返されている（41―44 節、ルカ二一 1

―4）。この「投げる」は44節では、「持っていたすべてのものを、彼女の生活全部を投げた」やもめの行いに示されているように、「献げる」の意味を含んでいる（ルカ二一 4）。

ⓓやもめ（ケーラー）

㋐形容詞ケーロス〈奪われた〉の女性形であり、「夫を奪われた女性・やもめ」。やもめは社会的弱者の代表であり、手厚い保護を必要とする。一般に古代社会では、保護者である夫を失った女性は、生活の糧を得る手立てや、さまざまな社会的な権利を奪われがちであった。やもめは貧しく、社会的に弱い立場に置かれるから、旧約聖書はやもめへの特別な配慮を呼びかけている（出二二21以下）。

㋑新約聖書でも、やもめは律法学者から財産を不法に奪われた（マコ一二40、ルカ二〇47）、貧しい者（マコ一二42・43、ルカ二一 2・3）として登場する。ルカ18章3節では、やもめであるがゆえに不利益をこうむった女性が、権利の回復を求めて裁判官に訴えを起こしている。また、ルカ7章12節では一人息子を亡くした母親はやもめである。

㋒やもめは独りで暮らし（1テモ五5）、寄るべがないという点で「みなしご」と同じである（ヤコ一27）。1テモテはやもめへの配慮を呼びかけ、子や孫や身内の者がやもめの世話をすべきだと説く（五4・16）。ヤコブ1章27節は、みなしご・やもめへの配慮こそが「神の御前に清く汚れのない信心」だとする。

㋓このようなやもめは、人間的な力に頼ることができず、ひたすら神だけを頼みとする人物の典型として描かれる。やもめは生活のすべてを投げ入れるほどに、神を信頼する者である（マコ一二43、ルカ二一 3）。神殿を離れず、昼も夜も神に仕える女預言者アンナも、やもめである（ルカ二37）。ルカ18章3節で訴えを起こすやもめは、「昼も夜も叫び求めている選ばれた人たち」（一八7）の代表者とされる。

㋔このようなやもめ像をもとに、キリスト者の共同体で祈りに専念する特別な階層が「やもめ」と呼ばれる。使徒9章41節に「聖なる者たち」と一緒に登場する「やもめたち」は、教会内のひとつの身分集団を表している。1テモテは、やもめの身分の条件を述べ（五9）、それに適ったやもめを「本当のやもめ」と呼んでいる（五3・5）。

④生きることすべてを神に任せる

ⓐイエスとエルサレムの指導者階級との一連の論争に続いて、やもめを「食い尽くす」律法学者（38―40節）と「生活全部」を神に投げるやもめ（41―44節）を描くことによって、二つの生き方が対比される。イエスがさい銭箱の向かいに座って人々の様子を見ていたのは、さい銭の額を知るためではなく、神に全幅の信頼を置き、生活全体を神にかける人を探すためである。人の力に頼れないやもめが、かえって神の目にかなうものなのである。

ⓑ列王記上17章に登場するやもめは、自分と息子のために一握りの小麦粉とわずかな油しか持っていなかった。しかし、やもめはエリヤの言葉に従い、まずエリヤのために小さいパン菓子を作る。すると、主がエリヤによって告げた御言葉のとおり、やもめの家では壷の粉も瓶の油もつきることがなかった。エリヤとやもめの行動を通して描かれているのは、主の言葉への絶対的な信頼である。このやもめもまた、残されているものを失えば死を待つばかりの状況の中で、そのかけがえのないものを献げた一人である。繰り返すことのできない献げ物によって、神への信頼が表されている。